

## 医学部学生の国際保健医療に対する意識調査

ヤマモト タロウ ハシズメ マサヒロ キチカワ ヨシコ  
 山本 太郎\* 橋爪 真弘<sup>2\*</sup> 吉川 理子<sup>3\*</sup>  
 キョ フミヤス カケ ヨウキ コンドウ ヒサヨシ  
 京 文靖<sup>4\*</sup> 加計 勇輝<sup>5\*</sup> 近藤 久禎<sup>6\*</sup>

**目的** 医療系大学のなかで医師養成コースに在籍する学生を対象として、国際保健医療協力に対し、どのような意識をもち、また、どのような活動を実際に行っているかといった意識・行動調査を行った。

**対象と方法** 調査方法としては自記式質問紙調査を用い、国際保健医療に対する意識・行動調査を行った。対象者は11大学、1,796人の医学部医師養成コースに在籍する学生より回答を得た。男性1,097人、女性699人で最少年齢は18歳、最高年齢は45歳、平均で男子学生22歳、女子学生21歳であった。

**成績** 全体の約3分の1にあたる32.3%の学生が「国際保健医療に興味あり」と回答し、約半数の54.1%の学生が「将来、国際保健医療分野の仕事に機会があれば関わってみたい」と回答した。また、「大学で国際保健医療の講義を行って欲しい」と回答した学生も46.0%いた。一方、「実際に国際保健医療に関わるような活動を実際に行っているか」という質問に、「現在行っている」または「過去に参加した経験がある」と回答した学生もすでに4%いた。男女間の比較、学年による比較では、国際保健医療への興味は、男子学生より女子学生のほうが、また、低学年（1-3年）の学生ほど高い傾向にあった。しかし、活動経験となると逆に在学期間の長さ按比例して高学年（4-6年）ほど高くなっていった。

**結論** 政府開発援助が予算実績の面で世界一になり、次のステップとして質の高い援助が求められている現在、国際協力に関わる人材の育成は欠かすことのできない問題である。今回の調査で医師養成コースに在籍する学生の国際保健医療に対する意識、経験の一端として、全体として国際保健医療に対する興味は高いものの、学年が上がっていくにつれ国際保健医療に対する興味が潜在化していつている可能性が示唆された。今後の医学教育のなかで国際保健医療教育をどのように実施していくか考えていく上で一つの基礎資料になるものと期待する。

**Key words** : 国際保健医療, 医学生, 質問紙調査

### I 緒 言

政府開発援助 ODA は1998年実績で100億ドルを超えている。ODA の実績は1991年より2000年

までの10年間連続世界で第1位となっている<sup>1)</sup>。また、世界保健機関やユニセフといった多国間協力や民間ベースでの国際保健医療協力も近年ますます盛んになってきている。世界保健機関への負担金は1999年時点で19.67%となっており、アメリカ合衆国に続いて世界第2位の負担国となっている。しかしそうした貢献の一方で、WHOに勤務している日本人は1999年時点で52人に過ぎず、国別の適正職員数を大きく下回っている。そうした状況のなかで、国際医療協力に携わる人材の育成は急務の課題となってきた<sup>2-6)</sup>。国際保健医療協力に関する講義を行う講座が大学または大学院で設置されてきている理由もそこにあり、人材育成に貢献することが大いに期待されている。

\* 京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻国際保健学講座

<sup>2\*</sup> 東京大学大学院医学系研究科国際地域保健学教室

<sup>3\*</sup> 国立国際医療センター

<sup>4\*</sup> 兵庫医科大学整形外科

<sup>5\*</sup> 高梁学園企画室

<sup>6\*</sup> 放射線医学総合研究所放射線障害医療部放射線障害診療・情報室

連絡先：〒606-8501 京都市左京区吉田近衛町  
 京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻  
 国際保健学講座 山本太郎

しかし、人材の育成が要請されている一方で、今後国際保健医療協力分野で働く人材の大きな供給源と期待されている医療系大学の若い学生たちが国際保健医療協力に対してどのような意識を持ち、また、どのような活動を実際に行っているのかといったことにたいする実態調査はほとんど行われてきていなかった。そうした反省から今回、医療系大学のなかで医師養成コースに在籍する学生を対象として国際保健医療に対する意識・行動調査を行ったので、ここにその結果を報告する。

## II 研究方法

### 1. 対象と方法

調査方法としては、自記式質問紙調査を用い、国際保健医療に対する意識・行動調査を行った。アンケートの配布は授業の空き時間などを利用し、同じ大学の学生が配布、回収を行った。

対象者は医学部学生である。11大学、1,796人の医学部学生より回答を得た。11大学の内訳は九州地方2校(385人)、近畿地方1校(35人)、東海・北陸地方2校(358人)、関東地方5校(886人)、東北・北海道地方1校(132人)となっていた。また、女子のみの医大の医大の参加は無かった。対象者は男性1,097人、女性699人であった。対象者の年齢は最少年齢が18歳、最高年齢が45歳、平均で男子学生22歳、女子学生21歳であった。対象者の学年は1年生が340人(18.9%)、2年生が234人(13.0%)、3年生が442人(24.6%)、4年生が434人(24.2%)、5年生が212人(11.8%)、6年生が134人(7.5%)であった。また、対象者の海外渡航経験についてみてみると、845人(47.0%)が「無し」と回答し、951人(53.0%)が「有り」と回答した。一方、対象者の海外在住経験についてみてみると、1年以上海外に在住したことがあると回答した学生は115人(6.4%)であった。対象者の将来の志望科としては、内科が最も多く36.0%、ついで外科(21.5%)、精神科(9.2%)、小児科(8.0%)、整形外科(5.3%)、産婦人科(4.6%)となっていた。

また、統計学的検定には $\chi^2$ 乗検定を使用した。

## III 研究結果

### 1. 海外渡航経験、海外在住経験

最も回答が多かった渡航頻度は2-4回であり、

表1 対象者

	男子学生	女子学生	合計
1年生	190	150	340
2年生	162	72	234
3年生	272	170	442
4年生	241	193	434
5年生	137	75	212
6年生	95	39	134
合計	1,097	699	1,796

全海外渡航経験者の41.3%を占めていた。一方、海外渡航経験が20回を超えると回答したのも10人存在し、休みのたびに海外へ出かけている学生の存在もうかがえる結果となっていた。また、平均渡航回数を男子学生、女子学生で比較すると男子学生は1.57回、女子学生は1.85回となっており、両者の間に有意差は認められなかった。

対象者の海外在住経験についてみてみると、1年以上海外に在住したことがあると回答した学生が115人(6.4%)おり、なかには10年以上海外で生活したことがあると回答した学生も6人いた。男女別にみた割合は、男子学生で6.0%、女子学生で6.9%と両者の間で有意差は認められなかった。国別にみると、アメリカ合衆国が最も多く53.9%(62/115)、ついでドイツ(10.4%)、イギリス(7.0%)、カナダ(4.3%)、フランス(3.5%)となっており、大半が先進国での生活経験となっていたが、なかにはガテマラ、カメルーン、ナミビアといった途上国で生活した経験があると回答した学生も少数ながら存在した。

### 2. 国際保健医療に対する興味の有無

国際保健医療に「興味有り」と回答した学生は全体で580人(32.3%)、「あまり興味なし」と回答した学生は998人(55.6%)、「まったく興味無し」と回答した学生は192人(10.7%)であった。これを1-3年生と4-6年生で比較すると、国際保健医療に「興味有り」と回答した学生は高学年の4-6年生で30.1%であったのに対し低学年の1-3年生で34.0%と若干高い傾向を示した。この傾向は学年が低いほど高く、1年生では43.8%と2-6年生の29.6%を大きく上回り、有意に高率( $P < 0.01$ )であった。一方、男女別に比較すると男子

表2 国際保健医療に対する興味の有無

	興味有り	あまり興味無し	まったく興味無し	無回答
1-3年生	34.0%	53.7%	10.8%	1.4%
4-6年生	30.1%	57.9%	10.4%	1.4%
男子学生	27.3%	58.2%	13.3%	1.4%
女子学生	40.3%	51.6%	6.5%	1.4%
全体	32.2%	55.6%	10.7%	1.4%

学生では国際保健医療に「興味有り」と回答した学生が27.3%であったのに対し、女子学生では「興味有り」と回答した学生は40.3%と有意に高率 ( $P < 0.01$ ) であった。特に、1年生の女子だけを見ても、「興味有り」と回答した学生は54.0%と「あまり興味無し」、「まったく興味無し」を合計したものの割合(44.1%)を上回っていた。

一方、興味があると回答した学生に興味を持った時期について訪ねたところ、男女とも医学部入学以前からという回答が最も多く、男子学生で57.5%、女子学生で72.9%を占めていた。また、興味を持ったきっかけはどの質問に対してはテレビや雑誌といったマスメディアを媒体としてという回答が男子学生で59.5%、女子学生で65.4%となっていた。その他のきっかけとしては、「友人を通して」という回答が全体で11.4%、「講義を通して」という回答が9.3%、「サークルを通して」という回答が5.7%であった。

### 3. 将来国際保健医療にかかわる仕事をしたいと思いませんか

将来、国際保健医療分野に関わる仕事に「積極的に関わっていききたい」と回答した学生は全体で86人(4.8%)、「機会があれば関わりたい」と回答した学生は885人(49.3%)、「あまり関心がない」と「まったく関心がないを」合計すると749人(41.7%)となっていた。低学年、高学年の別に比較すると、「機会があれば関わりたい」と回答したものが、1-3年生の低学年では5.7%、4-6年生の高学年では3.6%と低学年で高い傾向 ( $P < 0.05$ ) にあったが、「積極的に関わっていききたい」と「機会があれば関わりたい」を合計したものを比較すると低学年と高学年の間に有意な差はみられなかった。一方、男女別にみると、男子学生で

表3 将来国際保健医療分野に関わる仕事をしたいと思いませんか

	積極的に関わっていききたい	機会があれば関わりたい	あまり関心はない	まったく関心はない	無回答
1-3年生	5.7%	50.1%	32.4%	7.4%	4.4%
4-6年生	3.6%	48.2%	33.7%	10.5%	3.9%
男子学生	4.0%	45.7%	36.0%	11.3%	4.7%
女子学生	6.2%	56.2%	29.2%	5.0%	3.4%
全体	4.8%	49.3%	33.0%	8.7%	4.2%

は「積極的に関わっていききたい」と回答したものが4.0%であったのに対し、女子学生では「積極的に関わっていききたい」と回答したものが6.2%と女子に高い傾向にあった。また、「積極的に関わっていききたい」と「機会があれば関わりたい」を合計したものを男女別に比較すると女子で有意に高い傾向 ( $P < 0.01$ ) がみられた。さらに女子学生のなかでも1年生に限ってしてみると、12.0%が「積極的に関わっていききたい」と回答しており、「機会があれば関わりたい」とあわせると66.7%が将来国際保健医療分野に関わる仕事をしたいと回答していた。

一方、将来どのような形で国際保健医療協力に関わっていききたいかという質問(複数回答可)に対しては「発展途上国での保健医療協力を行いたい」と回答した学生が男子232人、女子189人であった。「国際機関に勤務してみたい」という回答は男子学生113人、女子学生115人であった。また、「国際災害救援医療に関わりたい」と回答した学生が男子127人、女子101人、「滞日外国人医療に関わりたい」と回答したものが男子で63人、女子で63人いた。「発展途上国での保健医療協力を行いたい」と回答した学生に途上国での滞在希望期間について質問したところ、「長期滞在上の協力を行いたい」と回答した学生は男子25.9%(60/232)、女子30.2%(57/189)であったのに対し、「短期の滞在を希望する」と回答した学生は男子43.5%(101/232)、女子56.1%(106/189)であった。

### 4. 国際保健医療に関する講義を大学のカリキュラムで取り上げて欲しいか

国際保健医療に関する講義を大学のカリキュラムで取り上げて欲しいかという質問に対しては

表4 国際保健医療を大学の講義で取り上げて欲しいか

	取り上げて欲しい	あまり取り上げて欲しいと思わない	まったく取り上げて欲しいと思わない	無回答
1-3年生	48.7%	34.8%	5.7%	10.7%
4-6年生	42.6%	41.5%	5.4%	10.4%
男子学生	39.8%	41.3%	8.0%	10.0%
女子学生	55.9%	32.2%	1.7%	10.2%
全体	46.0%	37.8%	5.6%	10.6%

「取り上げて欲しい」と回答したものが全体で46.0%、低学年と高学年で比較すると1-3年生で48.7%、4-6年生で42.6%と低学年に高い傾向( $P < 0.05$ )がみられた。また、学年が低いほど「取り上げて欲しい」と回答するものの割合が高く、1年生だけでみると61.2%が国際保健医療に関する講義を大学のカリキュラムで取り上げて欲しいと回答していた。一方、男女で比較すると「取り上げて欲しい」と回答したものの割合は男子学生で39.8%、女子学生で55.9%と女子学生で有意に高い回答( $P < 0.01$ )が得られた。

#### 5. 国際保健医療分野での活動に参加したことがあるか

国際保健医療分野での活動に参加したことがあるかという質問に対しては「現在活動を行っている」と回答したものが全体で2.4%であり、「過去に活動に参加したことがある」という回答を加えても4.0%であった。低学年、高学年の比較では、「現在活動を行っている」と回答したものは1-3年生で2.2%、4-6年生で2.8%であり、「過去に活動に参加したことがある」を合計するとそれぞれ3.8%、4.5%と高学年で高いものの有意な差はみられなかった。一方、男女別では「現在活動を行っている」と回答したものが男子で1.8%、女子で3.4%であり、「過去に活動に参加したことがある」を合計するとそれぞれ3.3%、5.3%となっており、女子で高い傾向( $P < 0.05$ )がみられた。

また、参加したことの活動を尋ねたところ、「大学のサークル活動を通して」と回答したものが最も多く38.2%、次いで「JICAやNGO

表5 国際保健医療分野での活動に参加したことがありますか

	現在活動を行っている	過去に活動に参加したことがある	まったく活動経験はない	無回答
1-3年生	2.2%	1.6%	91.9%	4.3%
4-6年生	2.8%	1.7%	92.7%	2.8%
男子学生	1.8%	1.5%	92.1%	4.6%
女子学生	3.4%	1.9%	92.6%	2.3%
全体	2.4%	1.6%	92.3%	3.7%

などが主催するスタディーツアーに参加したことがある」と回答したものが多く12.3%、「AMDAやMSFといったNGOの学生組織を通じて」と回答したものが9.8%となっていた。その他としては学会や講演会に行ったことがあるとか、勉強会に参加したことがあるといった回答がみられた。

## IV 考 察

全体でみて、対象者の47.0%という海外渡航経験者割合は、近年の円高と航空運賃の低下を背景とした若者の海外へのアクセスの良さを反映した結果といえることができるかもしれない。

「国際保健医療に対する興味」や「将来国際保健医療分野に関する仕事をしたいと思いませんか」という質問に対しては、学年が低いほど「興味がある」、「将来国際保健医療分野に関する仕事をしたい」という回答が多かった。こうした傾向は近年、国際保健医療に関心を持つ学生が増えてきたことを示している可能性と、医学部生活のなかで学年が上がっていくほど国際保健医療に対する興味や関心が低下しているという可能性がある。一方、興味を持った時期を尋ねたところ、最も回答が多かった時期は男女とも学年を問わず「医学部入学以前」からであったことからすれば、学部時代において国際保健医療に興味を持つ機会はあまり多くないといえるかもしれない。しかし、講義を通して国際保健医療に興味を持ったという学生も、国際保健医療に興味を持っていると回答した学生の1割くらいは存在することから講義に国際保健医療を取り上げれば、国際保健医療に興味を持つ学生の割合は大きくなる可能性がある。現状

では国際保健医療教育にもっと積極的に取り組むべきであるという意見は多いものの、満足できるカリキュラムは提供できていない<sup>7,8)</sup>。実際、国際保健を講義で取り上げて欲しいかという問いに約半数の学生は「取り上げて欲しい」と回答しており、そうした要望は強いと思われる。

男女別にみると男子学生より女子学生の間で「興味がある」、「将来国際保健医療分野に関する仕事をしたい」という回答が多かった。実際、近年海外青年協力隊で海外に出かける若者の男女比も女性の割合が大きく上昇してきており<sup>9)</sup>、本調査の結果を裏付けるような結果となっている。

一方、将来どのような形で国際保健医療協力に関わっていききたいかという質問（複数回答可）に対しては「発展途上国での保健医療協力を行いたい」と回答した学生が最も多く、次いで「国際機関に勤務してみたい」、「国際災害救援医療に関わりたい」と回答した学生が多かった。「発展途上国での保健医療協力を行いたい」と回答した学生に途上国での滞在希望期間について質問したところ、「長期滞在上協力を行いたい」と回答した学生は男子25.9%、女子30.2%に過ぎず、「短期の滞在を希望する」と回答した学生の割合（男子43.5%、女子56.1%）を下回っていた。これは別の調査で示された、保健医療分野における人材リクルートの困難さ<sup>2,6)</sup>を裏付けるような結果ともなっていた。そうしたリクルートの困難さの原因として宮城島ら<sup>3)</sup>は、(1)生涯雇用の原則のため長期休暇が不可能、(2)人事が大学医局の決定するローテーションにより規定され、(3)先端的な知識研鑽が途上国では困難であることなどを挙げているが、そうした意識が学生時代からすでに体感されているのかもしれない。一方、将来どのような形で国際保健医療協力に関わっていききたいかという質問に対し、国内で「滞日外国人医療の問題に関わりたい」と回答したのも7.0%おり、滞日外国人医療の問題にも関心を向けている学生がいることも明らかになった。

国際保健医療分野での活動に参加したことがあるかという質問に対しては「現在活動を行っている」と「過去に活動に参加したことがある」という回答を加えると4.0%であり、低学年、高学年の比較では、「現在活動を行っている」と回答し

たものも「過去に活動に参加したことがある」と回答したのも高学年で高く、「国際保健医療に興味がある」、「将来国際保健医療分野で仕事をしたい」という質問に対する回答と反対の結果となった。しかし、この結果は在籍期間の長いものが期間の問題としてそれだけ多くの機会に恵まれたと考えれば矛盾した結果とはいえない。一方、男女別でみれば、「現在活動を行っている」と回答したのも、「過去に活動に参加したことがある」と回答したのも女子で高く、「国際保健医療に興味がある」、「将来国際保健医療分野で仕事をしたい」という質問に対する回答と同様の結果となっていた。

また、参加したことのある活動を尋ねたところ、「大学のサークル活動を通して」と回答したものが最も多く、サークルの存在の大きさをうかがわせる結果となっていた。しかし反面、「JICAやNGOなどが主催するスタディーツアーに参加したことがある」、「AMDAやMSFといったNGOの学生組織を通じて」と回答したものの合計して2割くらいおり、学外の活動を通して国際保健医療に触れている学生の姿も浮かんできた。

本調査において質問紙の配布、回収に日本国際医療学生フォーラムの方々にお世話になった。ここに謝意を表する。

(受付 2001. 4. 10)  
(採用 2001.10. 19)

## 文 献

- 1) 外務省経済協力局. わが国の政府開発援助 ODA 白書. 1999年版
- 2) 中原俊隆. 諸外国における国際医療協力にかかる人材のリクルートに関する研究. 平成5年度国際医療協力研究委託費研究報告書. 1994.
- 3) 宮城島一明, 中原俊隆, 近藤健文. 日本の人的国際貢献の在り方—フランスの「国境なき医師団」との対比から—. 日本公衛誌 1995; 42 (1): 3-7.
- 4) 松田正巳. 今までの国際医療, これからの国際保健—国内の人材養成と外国人研修—. 保健の科学 1997; 39 (5): 318-321.
- 5) 渡辺 学. 今までの国際医療, これからの国際保健—政府開発援助における国際保健医療協力—. 保健の科学 1997; 39 (5): 307-312.
- 6) 我妻 堯. 途上国に協力できる医師の教育. 医学教育 1994; 25 (3): 169-172.
- 7) 郡司篤晃. 日本における国際保健医療教育推進の

ための基礎調査. 平成3-5年度科学研究費補助金研究  
成果報告書. 1994.

医療 1991; 5: 11-18.

8) 華表宏有. 国際保健教育の現状と課題. 国際保健

9) 国際協力事業団編. 国際協力事業団年報—JICAの  
事業内容と実績—. 1999年版.

---

## A SURVEY ON ATTITUDES AND PRACTICE CONCERNING INTERNATIONAL HEALTH

Taro YAMAMOTO\*, Masahiro HASHIZUME<sup>2\*</sup>, Yoshiko KICHIKAWA<sup>3\*</sup>,  
Humiyasu KYO<sup>4\*</sup>, Yuuki KAKE<sup>5\*</sup> and Hisayoshi KONDO<sup>6\*</sup>

**Key words** : International health, Medical students, Questionnaire study

**Objective** A survey was conducted to help understanding of the attitudes and practice of Japanese medical students concerning "International Health".

**Materials and Methods** One thousand seven hundred and ninety six students from eleven medical schools responded in the questionnaire study. One thousand and ninety seven were males and 699 were females with average ages of 22 and 21 years, respectively.

**Results** 32.3% of the students answered that they have/had an interest in "International Health". About half of the students answered that they wanted to have a lecture on "International Health" and they also had a willingness to engage in activities for "International Health" someday. Further, 4% of the students had experience of participation in activities related to "International Health". Female students showed that they have a stronger willingness to take part in the "International Health activities" than males.

**Conclusion** Human resources that can work in the field of international cooperation are required because ODA from Japan has ranked first in the world for nine years in succession. However, the willingness to participate in "International Health activities" among students decreased conversely with their years of learning in medical school. This result might be a basic material when we look at the education toward "International Health" in the medical school.

---

\* Dept. of Global Health and Socio-epidemiology, Kyoto University, School of Public Health

<sup>2\*</sup> Department of International Community Health, Graduate School of Medicine, The University of Tokyo

<sup>3\*</sup> International Medical Center of Japan

<sup>4\*</sup> Dept. of Orthopedics, Hyogo medical collage

<sup>5\*</sup> The planning section, Takahashi Gakuen

<sup>6\*</sup> National Institute of Radiological Sciences